

「海選」 中国経済新聞 080201 掲載

昔、中国の解放区（新中国の建国前、共産党の指導する政府と軍隊が支配していた地域。

これが広がって全国解放となった）の農村で、「豆選」というのがあった。選挙の時、候補者が腰掛けた背後に碗を置き、選挙人が気に入った候補者の碗に豆を入れ、その数で当選者が決まる。農民の大半が字を知らなかった時代の民主選挙方式だった。

建国後の人民代表選挙では、ずっと定員と候補者が同数の「等額選挙（額は定員を指す）」、つまり信任投票だった。候補者は、当該地区の共産党が青年・婦人などの組織と協議して選定、推薦された。

一九七九年の選挙法改正で、「差額選挙」が初めて採用された。候補者数が定員を上回る選挙のことで、「落選者が出る選挙」と解説した人もいる。もっとも、候補者数は全国・省・県などのクラスにより、定員の一・二ないし一・五倍という上限が設定されており、やはり共産党が中心になり協議して候補者を絞りこむ仕組みだったが、多少なりとも選択の余地ができたわけだ。

一九八六年に、吉林省梨樹県の北老濠村で「村民委員会（末端の農民自治組織）」選挙が行われた際に、村民が直接、候補者を指名し推薦して、多数の候補者から委員を選出し、話題になった。これを「海選」という。ちなみに「海」とは「非常に多く、際限なく広がる」意味である。一九九八年に全人代で採択された「村民委員会組織法」により、同委員会選挙での「海選」が公式に認められ、数年後には黒竜江省富裕県の県長選挙でも「海選」方式が取られた。今ではいろいろな団体の役員選挙も「海選」に依っているという。

中国の投票用紙には、正式の候補者名があらかじめ記載されていて、自分が選ぶ人名の下に印を付けるほか、候補者以外の人名を記入する空欄も設けてある。そこで登場するのが、お墨付きのない自薦・他薦の「独立侯選人（独立候補）」である。早くも八十年代に、湖北省潜江市の人民代表選挙で、姚立法という小学校教員が独自の判断で立候補し、さまざまな抵抗やいやがらせに遭いながら四回目に当選した。二〇〇三年には北京などでも、手書きのポスター、手弁当の運動員などで奮闘の末、三人が当選して地元のメディアや学者に高く評価された。

中国のある NGO によると、一昨年から昨年にかけて行われた各級人民代表選挙では、数百万の定員に対し一万人以上の独立候補が立候補したが、当選したのは〇・五%前後だったようだ。

憲法の規定により、直接選挙は郷・鎮および県までで、それ以上の省と全国の代表選挙は、一級下の代表大会が選出する間接選挙だが、この枠内でも「お仕着せからの脱却」が進んでいるわけだ。とりわけ末端の社区（コミュニティー）と村では「海選」による自治が定着して、「草の根民主」が根を張りつつあるといえよう。